

麗澤瑞浪高校の教育

——道徳の授業を中心にして——

石川 恭 治

目 次

- 一 麗澤瑞浪中学・高等学校における「道徳」・「道徳科学」指導案」の基底
 - (一) 序言
 - (二) 基底
- 二 麗澤瑞浪中学・高等学校における「道徳」・「道徳科学」指導案」の基底(心づかい篇)
 - (一) 序言
 - (二) 「誓の詞」教師用の指導書Ⅰ・Ⅱ」刊行後
 - (三) 指導案の仕事にとりかかって後
 - (四) 指導案に基づいて授業をしてみても

麗澤瑞浪中学・高校における教育の特色は沢山ありますが、その中でも特筆すべきものはやはり「道徳教育」であると思われます。昨今の教育界への失望と要求の高まりは、まさに日本の将来に対する不安と危惧の高まりと言えますように、根本には人間教育、ひいては道徳教育への待望論があると思われまふ。本校の建学の精神に「道徳教育」があるの言うまでもありませんが、本校も例外にもれず、時代の要請とともに発達段階に合わせ

た道徳の授業の取り組みに迫られました。以下は、その指導案作成に対する取り組みの顛末についての説明資料です。

一 麗澤瑞浪中学・高等学校における『道徳』・『道徳科学』指導案』の基底

(一) 序言

現在、麗澤瑞浪中学・高等学校では、生徒の発達段階に応じて道徳(中学校)・道徳科学(高等学校)の授業を行っています。その一貫性を確立するために大きな意味をもったのは、平成六年、三年余の月日をかけて『誓いの詞』教師用の指導書Ⅰ・Ⅱ』が、当時の校長野辺忠郎氏の指導の下で刊行されたことでした。この指導書は、道徳科学(モラロジー)の五大原理の骨子を、中学生・高校生の生活と心理に即応して、平易、簡潔に要約した『誓いの詞』(平成三年に制定)の教師用資料書なのですが、生徒たちへの適切な説明を行うための解説が目的でした。この解説書は、現在も本校の道徳教育にますます生かされていますが、同時に、中学・高校に一貫した道徳科学の授業の必要性を誘発したものであります。

そこで、現校長井上貞廣の指導の下に、それまでの道徳・道徳科学の授業を再検討し、発達段階に応じた、中学・高校に一貫して系統だった授業を展開するための指導案を新しく打ち立てることになりました。その成果が、三年半の長期に渡って作成された『道徳』・『道徳科学』指導案』なのです。『誓いの詞』教師用の指導書』の発刊から数えると、七年あまりに及ぶ努力の成果ということになります。

本校はもともと全寮制度の下、道徳教育を中心に知育・体育をバランス良く教育していることと、教師も生徒と同じ敷地内に住んで共に学ぶ『子弟同学』、『一視同仁』の教育環境と理念を持っていました。昨今、文部科学

省が、日本全国で起きつつある授業崩壊や学級崩壊、教育環境の悪化等にかんがみ、『心の教育』や『道徳教育』を声高に叫びつつありますが、もともと教育は、心の教育が中心なのであり、道徳教育が成り立ってこそ、知育も体育も成立するのであり、道徳教育が整然と行われていれば、自分も相手も社会も、進化・発展・向上することいわずもがなであるといえましょう。

戦後民主主義教育といわれていますがその実は、主体性のない、左翼イデオロギーに傾斜した教育に進んだという事は明白なことだと言えるのではないのでしょうか。同時に、占領下における日本臣下を意図したようなアメリカナイズ政策に見事に陥ってしまった日本というのは、まさに敗戦国の憂き身を実感せざるを得ないという状況なのでしょう。いずれにしろ、戦後の日本の教育の悪化を救うものは、まさに道徳教育なのではないでしょうか。自国の文化・歴史を正確に認識し発展させていく、アイデンティティに裏打ちされた道徳教育こそが、今後の日本を救っていく鍵になると思えます。

以下に述べるところは、『道徳』・『道徳科学』指導案』の基底と言えます。これにより、本校の道徳教育の特色、『道徳科学』の指導方向が、一応ご理解いただけると思われれます。特に本校の特色である道徳科学に焦点を絞ってあります。なお、中学生に道徳科学の部分が少ないのは、中学生は義務教育であるので、道徳を中心として学習させ、それに若干の道徳科学を入れるという立場をとった関係であることをご了承ください。

(二) 基底

①道徳科学の五大原理基底

一年生(中学一年生)「義務先行の原理」若干(以下、各学年ニューモラルの心を含む)

二年生(中学二年生) 「自我没却の原理」、「伝統尊重の原理」それぞれ若干
三年生(中学三年生) 「慈悲実現の原理」、「人心開発救済の原理」それぞれ若干
四年生(高校一年生) 「義務先行の原理」
五年生(高校二年生) 「自我没却の原理」、「伝統尊重の原理」
六年生(高校三年生) 「慈悲実現の原理」、「人心開発の原理」

②創立者の経歴学習・経歴A 廣池千九郎先生に学ぶ(廣池千九郎先生の生涯)
四年生(高校一年生) 中津時代・京都時代・前期東京時代(各学期一つの時代)
五年生(高校二年生) 伊勢時代・奈良時代・後期東京時代
六年生(高校三年生) 千葉時代・その他重要点 a) 二見今一色の実験(誠の体験)

b) 慈悲寛大自己反省の発見(困厄を含む)

③創立者の経歴学習・経歴B 廣池千英先生に学ぶ(麗澤瑞浪高校の創立者)
四年生(高校一年生) 初心忘るべからず・道的重要性
五年生(高校二年生) 伝統尊重他
六年生(高校三年生) 卒業生に贈る

④道徳科学(モラロジー)の理論

※中学生はニューモラルの心として、『心づかいの指針』を参考にする

一年生(中学一年生) プラス発想・幸福とは・幸福の実現・義務の先行
二年生(中学二年生) 自我とは・自己反省・感謝・伝統とは・伝統の心・伝統尊重
三年生(中学三年生) 神様とは・慈悲とは・慈悲の実現・思いやり実行・創立者は・創立者の夢
四年生(高校一年生) 『心づかいの指針』(第五章 道徳的な義務↓義務先行の原理)
五年生(高校二年生) 『心づかいの指針』(第三章 自我の没却↓自我没却の原理)
六年生(高校三年生) 『心づかいの指針』(第六章 感謝報恩の心↓伝統尊重の原理)
(第七章 人を育てる心↓人心開発救済の原理)
(第八章 道徳実行の効果)

⑤『ニューモラル』から(『ニューモラル』を資料として学ぶ↓「誓いの詞資料」掲載)
四年生(高校一年生) ニューモラルから①実行しているはずなのに ②ていねいなおばあさん

③みんながするから? ④古牧温泉との出会い

五年生(高校二年生) ニューモラルから⑤日に新たに他 ⑥一日も欠かされなかったお見舞他
六年生(高校三年生) ニューモラルから⑦旅行をやめてボランティアに参加した女子大生

⑥国際化社会生活のマナー

四年生(高校一年生) テーブルマナー(日本式)・挨拶・手紙の書き方・看護
五年生(高校二年生) テーブルマナー(欧米・中国)・電話の応対・お見舞いのマナー・看護のマナー(疑似体験)
六年生(高校三年生) お茶の入れ方・出し方・訪問・乗り物のマナー、英文手紙の書き方

⑦計画・反省

四年生(高校一年生) 高校生の旅(高校一年間の計画)・年間実施計画の反省
五年生(高校二年生) 大人への旅(二〇歳までの計画)・年間実施計画の反省
六年生(高校三年生) 人生への旅(人生・将来の計画)・高校生活の反省

⑧討論各種

四年生(高校一年生) ・今、世界にどのような問題があるのか
・人はどのようなときに祈るのか
五年生(高校二年生) ・教師宅への訪問の意味を考える
・親心について(事故・沢庵和尚の資料)
六年生(高校三年生) ・将来保護者に何をさせていたただくか
・社会に出たら何をさせていたただくか

⑨道徳科学学習への動機付け

四年生(高校一年生) ・プラス発想・プラスのイメージ
・簡単指圧(思いやりの実践)・自分探し(エゴグラム)
五年生(高校二年生) ・格言学習・感謝の便り・懇談(信念の力)
六年生(高校三年生) ・友を誇る・プラス発想・プラスの行動(思いやりの実践)・夢は必ず実現する(日常生活の方法)
(法)・解決方法は必ずある(日常生活の方法)

⑩体験談

四年生(高校一年生) モラロジィとの出会い(校長・教頭)
モラロジィとの出会い(授業担当者・学年担当者)
五年生(高校二年生) 伝統に関して(校長・教頭)
伝統に関して(授業担当者・学年担当者)
六年生(高校三年生) 『道徳科学の概説』・『論文』への道
(授業担当者・学年担当者の体験談を入れながら今後の道徳科学の学習の仕方を推奨していく)
↓生涯学習への道

⑪ビデオ学習

四年生(高校一年生) a) 「バルセロナへの道(カール・ルイス)」↓自分の目標を立てる
b) 「廣池千九郎先生の生涯」↓創立者の心を知る

c) 「中村久子の生涯」 ↓人としての義務(感謝)を知る
 d) 「オードリー・ヘップバーンの生涯」 ↓人としての義務、(奉仕)を知る
 五年生(高校二年生) a) 「典子は今」 ↓自立心・自我没却のために

b) 「神谷美恵子の生涯」 ↓(自分の進路を考える・伝統尊重の心)

c) 「奇跡の人(ヘレン・ケラーの生涯)」 ↓自我没却・慈悲実現への道を知る

d) 「ジョーイ」 家族の愛・伝統尊重を知る

六年生(高校三年生) a) 「井深八重の生涯」 慈悲実現・人心救済への道

b) 「ひめゆりの塔」 人心救済への道

※ビデオ教材は常に研究を必要とし、以上挙げたものに決してこだわりませんが、必ず五大原理に当てはまるものとし、各学年の五大原理の基底に合わせて考えていきます。

細部は省きましたが、以上が麗澤瑞浪中学・高校の「『道徳』・『道徳科学』指導案」を作成するに当たったの基底です。次に、この基底を作るときの心づかいについて述べていきます。

二 麗澤瑞浪中学・高等学校における『道徳』・『道徳科学』指導案の基底(心づかい篇)

(一) 序言

麗澤瑞浪中学・高等学校における「『道徳』・『道徳科学』指導案」の基底については、一九九九年刊行の『麗澤

瑞浪モラロジー研究』(第三号)にすでに書きましたので詳細は省きます。ただし、「道徳科学」(モラロジー)は、最高道徳実行上の注意条件(二三)「言うことは易く行うことも易く、心事は極めて難し」にありますように、「心づかい」(精神作用)を問題とします。実行する人間の精神作用が問題になるわけです。

こうしたことから、指導案をまとめあげる私自身の精神作用が問題になると考えました。そこで今回は、誠に恥ずかしいことですが、当時の私自身の精神作用をここに明らかにして、今後の指導に当たっていききたいと思えます。

(二) 『誓の詞』教師用の指導書Ⅰ・Ⅱ』刊行後

三年余の年月をかけて、「教師用の指導書」が平成六年に刊行できましたことはこの上ない喜びでした。しかも、病気療養中とはいえ、野辺忠郎校長の元気なうちに完成にこぎつけることができましたことは、関係者一同の多大な努力と協力があつたればこそで、感謝のほかありませんでした。ともあれ、「間に合う」ことができました。そこで、ほっとしていたわけですが、その後、現在の井上貞廣校長から、今度は、「道徳・道徳科学の授業を全面改定して、発達段階に応じた六年分の指導案を作って欲しい」という要望がありました。正直なところ、困ってしまいました。それは、①私自身が今日まで、「道徳・モラロジー」の授業を受けたことがないこと ②新しい道徳、特にモラロジーの授業のモデルがないこと ③発達段階に依拠してといっても、道徳科学についてはその区別が極めて不明確なこと、そして④私自身の日頃の心づかいが不十分極まりないこと、でした。先述の教師用の指導書は、資料中心でしたので、何とか皆でまとめ上げていくことができたわけですが、今回は、まとめ上げていく私自身の心づかいも大きな問題点となるわけですので、最初から行き詰まってしまうまいか。おまけに、今後、

この指導案をたたき台として、その後もどんどん改定する計画でしたので、コンピュータに、残さなければなりません。当時の私のコンピュータの技術は極めて稚拙ですので、遅々として進みません。今の技術なら、一年は早くできたとも思っています。結果的に、三年半もかかってしまい、井上校長はじめ、関係者の皆様にたいへん申しわけなく思っています。しかしながら今は、ともかく完成にこぎつけ、実際に授業に役立て、協力者の先生方の多大な努力もあり、それなりの効果をあげていることに一安心をしています。

さて以上のように、井上校長の依頼から、ずいぶん困ってしまい、とほくに暮れましたが、ともかくもやらねばならない仕事であり、どうせやるなら自分の心づかいを直しつつすれば良いではないか、というプラスの思いが湧き起こり、取り掛かることにしました。その時、自分自身で心がけたことは、「不平不満の気持ちの時やマインスの気持ちの時は、この仕事をすぐにストップしよう」ということでした。

(三) 指導案の仕事にとりかかって後

以上のようなことから取りかかり始めましたが、三つの困難に出会いました。一つは、やはりコンピュータの技術が稚拙だったことと、コンピュータが古くて容易に進まなかったことです。そうしますと、余計にイライラしたりするものですから、そこにまた、不満やマイナスの気持ちが働きますのですぐにストップせざるを得ませんでした。廣池千九郎先生が、ご自分の心を整え、一字一句、人々の幸福を願いつつ道徳科学の論文をはじめ、その他の著述を残されたことを思いますと、この程度では申しわけないと思ひ、気を取り直しつつ、再び取りかかり始めるといった繰り返しでした。時間はどんどん過ぎていきました。しかし、驚いたことに、井上校長はじめ、他の先生方は一切、一言も、注意も注文も、文句も述べられませんでした。最初の約束の一年が過ぎてても

した。

二つめの困難は、やはり内容をどうするかの問題でした。発達段階に応じて申ししても、一年生(中学一年生)から六年生(高校三年生)までがどのような順番で学習を積み重ねていったら良いかということについて、一貫した道徳教育を考える手がかりがありませんでした。これには、「道徳」は義務教育なので従来どおりのもので良い、それに少し道徳科学を入れること、という井上校長のアドバイスがありましたので、気が軽くなりました。問題は、四年生から六年生までの道徳科学です。それにあたっては、①道徳科学の五大原理を『モラロジー概説』の順番に当てはめる、という考えになりました。これは、どの教師が授業をしても、道徳科学を正しく伝えなくてはならないからです。教師の体験談などふんだんに取り入れても良いのですが、それですと、どうしてもいつのまにか「自分のモラロジー(道徳科学)」になってしまいます。例え体験談でも、この五大原理に結び付けて話していただければ、モラロジーから外れることはないと思います。

次は②廣池千九郎先生の経歴を従来通りの一年間でなく、三年間で学習させるといふ考えにまとまりました。これは四年生の時に比べ、六年生などははるかに大人になり、教師や親の心もしだいに分かるようになりますので、このような時にも道徳科学の創立者の心を継続学習させたほうが良いという考えからでした。同時に、麗澤瑞浪高等学校を創立された、廣池千英先生の心をも学習させようということになりました。次は③一般に行われている「道徳」も入れ、道徳科学の五大原理に結びつけ、道徳科学の入門のような形で取り入れる、というものです。マナーや討論等が入ります。④は、先述の教師用の資料も使おうということになりました。これは生徒だけでなく教師自身もたいへん勉強になるからです。⑤は、生徒の時代の欲求に応じて、視覚にも訴える、音響効果も著しいビデオ学習を取り入れるということでした。これは、水野治太郎麗澤大学教授のアドバイスです。映

画も効果がある、ということも教えていただきました。要は五大原理に当てはめれば良いわけです。

三つ目の問題は、指導案をまとめ上げていく私自身の心づかいについてでした。日ごろ、生徒に向かってプラス発想やプラスの心を訴えていても、大きなプレッシャーがかかりますと、どうしてもマイナスの気持ちが出てきます。しかし、マイナスの気持ちや心づかいで指導案を作成しても、それほど効果はないと思いますので、この自分自身の気持ちと闘うのがもつとも困難だったと思います。しかし、こうしていろいろなアイディアが整ってまいりますと、不思議に夢が湧き、やる気が増してまいりました。何よりも、生徒の将来を思い、静かな夜、心を整えつつ、こつこつと作業に取り組めたことは幸福でした。在校生だけでなく、卒業生にもこうした授業をしたいなど何度思ったか知れませんが、マイナスの気持ちの時は、即座に作業を中止しました。出来上がった時、少しは自分の心づかいを良くしながら進めたものだからと自信が持てるものになる、そう信じて来る日も来る日もこうした作業をしました。作業をしながら幸福な気持ちになり、夢を追いつつ仕事をできたことは、取りかかるときには考えもしなかったことでした。井上校長に感謝の気持ちさえ湧いてきますから、人間の気持ちというものは不思議なものです。まさに、考え方が変わってきたのです。私自身の心が、変わってきたのです。そのように、自分自身の心づかいが良い方向に変化してきた驚きがあったのですが、これを道徳科学の授業を担当する教師に持っていただきたいと思ひ、指導案の授業の最初の部分に、「生徒の幸福を心の中で祈りつつ、教卓の前に立つ」という文章を入れました。もちろん、これは授業の最初だけでなく、常日ごろ、日常茶飯事に願うことであり、最高道徳の「慈悲」をを目指すことが本当であると思ひます。授業はもちろん、生徒の将来を想いますと楽しく、わくわくしてきます。道徳科学が少しでも縁づいていきますようにと、願いつつ仕事をさせていただいたことは、私にとつてもたいへん実り多いことで、この仕事が途中から喜びに変化していったことが、今でも生き

生きと想い出されます。

(四) 指導案に基づいて授業をしてみても

各年の、それぞれの学年の生徒の感想を読みますと、たいへん素晴らしいものが多いことに気づきました。授業で寝てしまうような生徒もはるかに少なくなり、道徳の授業を待ち焦がれる生徒が多くなりました。「先生、今日の授業は何をするんですか!」「先生、来週は何をするんですか!」そういう声が多くなりました。否定的媒介の声ではなく、期待をもった声が多いのです。感想文などは、全国のモラロジアンに読んでいただきましたと思うようなものばかりです。もちろんこれも、生徒のプラスの気持ちを引き出した結果なのです。教育のいわゆる「エデュケーション」は、語源がラテン語の「エドゥカーレ」(養育する)、これと関係する「エドゥカーレ」に、引き出すとか、抜くという意味があるというのですが、引き出すだけでは、人間の九九パーセントを占めているといわれる「利己心」も引き出してしまいます。しかし、プラスの心は引き出すべきだと思います。廣池千九郎先生は、教育はエデュケーションよりも、エンライトンメント(啓発・啓蒙とか訳されていますが、元の意味は光を注ぐ、照らすという意味です。廣池千九郎先生は神の心を人間の心に移植するというように説明されたそうです)の方を考えたそうです。そして、これに「開発」という意味を当てたこのことです。私も、この指導案は、まとめあげた後で思うことですが、「開発」にならなくてはいけない、さらにもっと深い「救済」になってこそ教育である、そう思うようになりました。道徳科学は照らす教育なのです。

ともあれ、以前よりはるかに生徒は好意的に「道徳科学」を受け入れるようになりました。卒業後は、社会人対象のモラロジ―生涯学習講座の受講に結びついていますし、生徒の出身地においてもそれぞれに生涯学習というシステム、あるいは累代教育のシステムがありますから安心です。

これからはこの指導案をたたき台にして、改善に改善を加えつつ、若い先生方にも、道徳科学に積極的に取り組んでいただきたいと思っています。望月幸義麗澤大学教授の言われる通り、「考え方を変えますと、心が変わります。心が変わりますと、莫大な効果が出ます」。まさにその通りです。マイナスの固まりのようだった私でも、こうしてしだいにプラスの心になり、夢や生きがいを持って生活できるようになったのです。先生方も勇気を持って取り組んで欲しいと願っています。生徒だけでなく、自分自身の人生も、信じられないほど向上し、豊かな生き生きとしたものになってきます。まさに「生まれ更わり」が起きてきますから、嬉しいものです。もっとも驚くべきは、昨年、今年と、在校生の中からみずからの意志で、モラロジの生涯学習である「概説講座」を受講する生徒が連続で出ていることです。かつて、あれほどモラロジ（道徳科学）にマイナスの気持ちや無関心を抱いていた生徒達が、「面白い」とか「楽しい」とか言うようになったのは画期的なことでした。もともとモラロジ（道徳科学）は聖人の教えなのです。廣池千九郎先生は、ご病気の後遺症が残っていても、心の底から、人類一人の安心・平和・幸福を願いつつ、ご自分の心づかいを最高道徳心に整えつつ、書き残され、実行されたのです。書かれていることに嘘は一つも無いのです。本当に、私達の安心・平和・幸福を願いつつ書かれたのです。実行されていかれたのです。その教えを少しでも実行したら、効果が無いことはありません。

どうも、私達はいつのまにか多忙に紛れ、創立者の心を忘れ、等閑視し、モラロジ（道徳科学）を勉強してもしなくても人生はさほど変わらない、今の自分の家庭がますます幸福ならばそれで良いのではないか、などと思っていたのではないのでしょうか。もしそうならば、もったいない人生を過ごしてきたように思われます。最高道徳の実行など、自分のような凡人には到底無理だなどと、心づかいをマイナスにして、凡人の誰でも実行できるようと心を尽くして書き残されていた廣池千九郎先生の心をおもんばかることをしなかつたように思います。

戦後の平和な日本に生活し、そのくせ心は少しも安心・満足のない、いつ壊れるかも知れない小さな家庭のみの幸福づくりに汲々として、何となく満ち足りない生活をしてきたように思います。何よりも私自身がモラロジ（道徳科学）に確信が持てず、本当の勉強を忘れて来たように思いました。今後は、この経験を大切にして、改めて道徳科学の研究を進めていきたいと思えます。